

外出禁止令、道路封鎖、家宅捜査 — イスラエル軍のシリア内での暴挙

イスラエルが占領したシリア領内でのプレゼンスを強化する中、ダマスカスの新政府は彼らを見捨てたと住民は言っている。

フーダー・マタル（シリア人ジャーナリスト）、Drop Site、2025年2月15日、脇浜義明訳、田中一弘補訳

*脚注は訳注



2025年1月16日、シリアのゴラン高原近くのアル・ハミディア地区にあるイスラエルの戦車。

昨年12月アサド政権崩壊後、イスラエルは、従来から占領していたゴラン高原を超えて、シリア内の軍事的プレゼンスを強化している。しかし、イスラエル軍が住民を脅かして村や町を支配しているが、報道関係者を逮捕したり尋問したりするので、現地からの報道が非常に少ない。そういう中でシリア人ジャーナリストのフーダー・マタルはシリア南西部の3村を訪問・取材した。イスラエル軍に占領され、村人が苦しい生活を強いられている3村である。— ドロップ・サイト

シリア、アルハミーディア—ダマスカスから南東へ約50キロメートル離れたところに小さなアル・ハミーディア村がある。村人たちの家は、羊飼いやブ・モアーズの家と同じように、火山地形であるこの地域の特産物である黒い玄武岩で造られている。人里離れた田園風景の中にラベンダーとサルビアの香りが漂っている。

しかし、2か月前から村の生活が一変した。イスラエル軍が獲得したシリア領で自分たちのプレゼンスを強化して戦車と部隊を展開し、アル・ハミーディア村を包囲し、家屋破壊、重要なインフラの破壊、前哨基地建設、村人の行動制限、村人の追放、逮捕などを行うようになったからだ。

「いったん追い出されたけれど、また村に戻ってきた」と、55歳で、5人のこどもがいる羊飼いやブ・モアーズが私に語った。「村人の生活が壊された。惨めになり、先は真っ暗だ。」

アル・ハミーディア村は、シリアとイスラエルの間のゴラン高原の国連平和維持軍がパトロールする国連緩衝地帯に位置する。イスラエルは1967年戦争でゴラン高原の大部分をシリアから奪い取り、不法入植地を建設し、

ついに1981年にイスラエル領に併合した。これは国際社会から認められなかったが、2019年に第一期トランプ政権がゴラン高原に対するイスラエル主権を公式に認めて、国際社会から批判を招いた。イスラエルが占領する地区とシリアの間に非武装緩衝地帯を設けて国連平和維持軍が監視する決定がされたのは1974年であった。

昨年12月初旬にアサド政権が崩壊したとき、イスラエルはシリア全土に大規模な空爆を開始した。これはシリアに対する先制攻撃で、一般に慣習として認められる軍事力、つまり各国が国境と主権擁護のために備える通常の軍事力を徹底的に破壊した。さらにイスラエル軍はシリア内部に侵攻し、緩衝地帯やそれより先のヘルモン山を含むシリア領を征服した。イスラエル高官は無期限にシリアに駐留する意図を明らかにし、イスラエル軍は滑走路や軍事的前哨地や基地を建設して、軍事的プレゼンスを強化しつづけている。

この地域にある14村の35,000人以上の村人は、外出禁止令や道路閉鎖や家宅捜査などで、イスラエル軍の支配下に入っている。一番大きな被害を受けたのはアル・ハミーディア村とクドナ村とアル・ラワーディ村で、アル・ハミーディア村からは50世帯が逃げ出した。村に留まった人々はイスラエル占領下での生活と闘わなければならなかった。アブ・モアーズの長男のモアーズは、近くのハーン・アルナベ村にある高校への通学が事実上不可能になったと言った。「いつも通る道は6キロメートルほどですけれど、イスラエル軍が道路封鎖しているので、25キロの距離を通学しなければならなくなりました」と16歳のモアーズが言って、通学距離が長くなり、金もかかるようになったので、多くの生徒が困っていると付け足した。「同級生、特にサムダニヤム村の子どもは試験を受けることが出来ませんでした。」

イスラエル政府高官は、イスラエル軍は長期に渡って駐留すると、公式に宣言した。「イスラエル国軍は・・・安全保障が必要な地帯に・・・無期限に駐留する」と、2週間前に、イスラエル・カツ国防大臣がビデオ声明で宣言した。彼はヘルモン山に立って、「我々はシリア南部の安全保障が必要な地帯に敵対勢力が入ることを許さない」と宣言した。

住民は、新シリア政府や誰からの支援もほとんどなく、ただイスラエル軍占領下にいるだけである。「私たちはまた1967年になると恐れている。新シリア政府はクネイトラにまったく関心がありません」¹と、クネイトラの元都市計画設計員だったアブデル・ハキームが、イスラエルがゴラン高原の大部分を奪った1967年戦争を引き合いに出して、私に語った。「クネイトラは単に一つの土地ではなく、それは占領地シリアのシンボルです。私たちは子どもたちがこの土地を愛するように育てている。」

しかし、このような状況に関する現地からの報道は非常に少ない。住民が報道機関に話したり、SNSで映像で流したりすると、たちまちイスラエル軍から虐待され、家屋を破壊され、村から追い出されると脅されているので、誰も報道機関に話そうとはしない。現にアル・ラワーディ村では、家を燃やされたり、破壊されたりして、多くの家族が村から逃げ出さざるを得なかった。イスラエル軍は一定の時間帯に村からの出入りを禁じる命令を出し、村人のIDカードや電話番号を記録した。写真撮影や報道記者との接触は厳禁である。

乳製品の生産で有名なジャバーター・アル・ハシャブ村では、イスラエル軍は放牧地を限定した。軍が限定した牧草地の地図と利用時間帯をWhatsAppで流したと、村長が私に語った。この指定の場所と時間帯以外にいる羊飼いは逮捕された。

先月、アル・ハミーディア村で、活動家で弁護士のアムハンマド・ファヤードが、フランス人ジャーナリストのシルヴァン、シリア人ジャーナリストのユーセフ・ガライビと共に、イスラエル軍を撮影したとして、逮捕された。「軍施設や機密場所を撮影したとして、つかまり、殴打され、逮捕されました」とファヤードが話してくれた。「携帯電話、ノート・パソコン、筆記や記録に関する用具が全部没収されました。ハード・ドライブは壊されました。手錠と目隠しされて、尋問所に連れていかれました。移動距離から察すると、その尋問所は県の役所みたいなところだと思います。」

¹ 1967年は第3次中東戦争。シリアのクネイトラがイスラエルによって占領され、廃墟となった。クネイトラはゴラン高原にある町。

アサド政権下のシリアは、公的には、共にイスラエル国への反対を誓った中東の国家や非国家団体の緩い連合体である抵抗の枢軸の一部であった。しかし、他のメンバー（ヒズボラ、イラン、イエメンのフーシ派、イラクのイスラム・レジスタンス）と異なり、シリアはイスラエルのガザ・ジェノサイド戦争に対応してイスラエルを攻撃しなかった。

アサド政権への反乱は、世俗的色彩があったアサド政権を倒してスンニ派イスラム国を造るという目的を持ったハイアト・タハリール・アル・シャーム (HTS)²が主導した。HTSの指導者アハマド・シャラアがシリアの暫定大統領となった³。イスラエルの大規模なシリア空爆やゴラン高原の領土を占領していることへのシリア民衆の抗議の声に対して、シャラアは外交的手段で取り組むと表明した。「内戦で荒廃したシリアはこれ以上戦争をする余裕はない」と、12月14日に述べた。「現段階で優先すべきは国土の再建と社会の安定であり、さらなる国土破壊になる紛争に向かうべきではない。」⁴

それでも、先月、シャラアは慎重な言葉でイスラエルのシリア領侵攻を批判した。「イスラエル軍がシリアの地域に駐留するのは、イランの民兵やヒズボラがいるためだ。イスラエル軍がダマスカスを解放したわけではない私は信じている。現在イスラエルは口実を設けてシリアの地域、緩衝地帯に軍を進めている。これは1974年のシリアとイスラエルの軍事力引き離し協定違反になり、シリアは以前の状態に戻すために国連軍が緩衝地帯を管理することを歓迎する。」と付け加えた。

新シリア政権はイスラエルのシリア領土への侵攻と占領と戦う気がまったくないので、国境地域の住民は自分で自分を守るしかない。

クネイトラの元都市計画主任だったクターイエシュは、12月9日からのイスラエル軍のクネイトラへの侵攻と、新シリア政府の「クネイトラ無視」の姿勢を記録してきた。彼は、「ほぼ二か月間知事も警察も住民を守る軍もない状態が続き、救援物資も1月26日まで届かなかった」と語った。

クネイトラの暫定知事となったムハンマド・アッサイドは、新シリア政府はイスラエル軍のクネイトラ侵攻と占領に関して知らん顔だと繰り返し言っている。「アサド政権の崩壊で、もうイランやヒズボラの影響もないので、イスラエルはそれを懸念する必要はないのです」と、WhatsAppを使ったドロップ・サイトのインタビューで、アッサイド暫定知事が語り、新シリア政府がイスラエルと交渉すらしていないと付言した。「私たちの主張ははっきりしています。イスラエル軍は国際法に従って即時撤退することです。」彼はさらに、地域の指導者たちはイスラエルの地元への「援助」の申し出を拒否し、正式に政府と交渉することを要求したと述べた。

とはいえ、イスラエルの申し訳的な「援助」の申し出どころか、新政府からの援助が非常に少ないのだ。羊飼いのモアーズはやむなく羊を売り払った。「私は家族と羊を連れてサアサーに避難しましたが、その費用は300万リラ（約230ドル）かかりました。サアサーでは家賃が大変高く、学校へ通っている子どもが4人います。それで、またアル・ハミーディア村へ戻りました。結局、羊を全部売り払いました — 羊の飲み水は井戸から汲み上げるポンプを動かす電気がないし、放牧地はイスラエル軍に奪われています」と彼は話した。

アル・ハミーディア村では水道と電気のネットワークがイスラエル軍のよって破壊されているので、クネイトラ県の赤三日月社が2日間水タンクを提供した。しかし、量が不十分であった。井戸を持っている村人が水をくれたが、羊を満足させるには不十分で、多くの人は羊が渴きで死ぬ前に売り払うより他はなかった。後になってイスラエル軍は、自分たちが破壊した水と電気のインフラを一部修理することを許可した。村の外から修理労働者が村へ入ることを許可した。

クネイトラ県赤三日月社の所長のジュマ・ユーニス医師は、救急隊が12月のイスラエル侵攻以来ずっと働きづめだと言った。「私たちは食料と非常時補給品を、特に家を焼かれたり壊された世帯に届けました。水を配給し、治

² アルカイーダ系のアル・ヌスラ戦線と複数の過激グループが合併して結成された。

³ 彼はアサド政権時代に裁判官だった女性をクビにし、女子学生に顔を隠すショールを義務づけるなど、タリバンと同じイスラム教政治を始めた。

⁴ HTS がアサド政権に勝利できたのはイスラエルと米国の支援があったからである。イスラエルは HTS の同盟軍であった。

療をしました。しかし、赤三日月社は手持ちの補給品や薬を緊急用にとっておいたものを含め全部使ってしまい、どこからも支援がないので、これからは地元の人は自分たちで何とかしなければなりません。」

地元住民は WhatsApp グループやフェイスブック・ページを開設して情報を流した。ヤザン・アッバスとその仲間、アサド政権崩壊後すぐに、地元住民を集めて WhatsApp グループを結成し、ハーン・アルナベの避難民を支援した。「私たちはやむなく逃げてきた4家族を助けています。他の村人たちはダマスカスやその周辺地区に逃げて親戚の家で避難生活をしています。4家族の人たちは着の身着のまま逃げてきたので、住居や暖かい衣服を供給しています。」



イスラエル兵がクネイテラに通じる道路で道路を封鎖し、シリアの村への出入りを制限している。地元住民が撮影した画像で、使用許可を得ている。

大学生のムハンマド・アル・ムテブが立ち上げた別の草の根運動は、主としてイスラエル軍の乱暴を記録して発信しているが、メディアからは注目されない。「報道関係者はアサド政権崩壊を歓迎する記事ばかり書いて、新政府やイスラエルを批判することには関心がないのです。」とアル・ムテブが言った。

アル・ハミーディア村ではウンム・モアーズが、毎朝、二階建ての家の屋根へ上がって、イスラエル軍ブルドーザーの動き — 地面を掘り起こし、コンクリートの防壁を作り、次第に彼女の家に近づいてくるブルドーザーの動きを見てから、農地へ行って牛の世話をする。47歳の彼女はチーズとヨーグルトを造り、羊や牛を持っていない人々に配っている。「うちの家には部屋が4つあります。しかし、家族はみんな一つの部屋 — 外の状態がすぐ分かる大通りに面した部屋で寝ています。イスラエル軍は前哨基地を造り、私は樹木を植えています。子どもたちはこの学校へ行かせます」と彼女は言った。